

表 4. 支持療法に関して標準的診療を行っている医師の割合

| がん診療について(range 1-6) | 5. そう思う～6. とても思う 回答割合 | | | |
|---|-----------------------|------|-----------------------|------|
| | 拠点病院 (n=4198) | | 拠点病院以外の病院 (n=2019) | |
| | n | % | n | % |
| ○がん疼痛のある患者に対して、経口オピオイドを投与するときは、原則として便秘に備えて下剤を処方している | 2890 | 68.8 | 1420 | 70.3 |
| ○がん疼痛のある患者に対して、あるオピオイドを一定量投与しても効果がないときは、異なるオピオイドを使用することを検討している | 2910 | 69.3 | 1419 | 70.3 |
| ○オピオイドを定期投与しても時々痛みがある場合(突出痛)には、定期量の6分の1を原則としたオピオイドを疼痛時で使用できるようにしている | 2905 | 69.2 | 1445 | 71.6 |
| ○神経障害の疼痛(神経叢浸潤・脊髄浸潤など、びりびり電気が走るような・しびれる・じんじんする痛み)に対しては、プレガバリン、アミトリプチロンなどの鎮痛補助薬を投与している | 2495 | 59.4 | 1194 | 59.1 |
| ○酸素吸入や輸液の減量などをしても緩和しない呼吸困難があるがん患者に対して、モルヒネなどのオピオイドを持続投与することを検討している | 2746 | 65.4 | 1347 | 66.7 |
| ○せん妄を診断したとき、まず原因を想定しての治療に取り組むようにしている | 1998 | 47.6 | 985 | 48.8 |

(注)「がん疼痛に対するオピオイドの処方を適切に実施している医師の割合」については、「がん疼痛のある患者に対して、経口オピオイドを投与するときは、原則として便秘に備えて下剤を処方している」「がん疼痛のある患者に対して、あるオピオイドを一定量投与しても効果がないときは、異なるオピオイドを使用することを検討している」「オピオイドを定期投与しても時々痛みがある場合(突出痛)には、定期量の6分の1を原則としたオピオイドを疼痛時で使用できるようにしている」の3つの質問に対する回答割合の平均値で算出している。

「がん疼痛に対するオピオイドの処方を適切に実施している医師の割合」

がん拠点病院 69.1%、非がん拠点病院 70.7%